京都造形芸術大学紀要二〇号（二〇一五）の発行にあたって

今年も本学の制作と研究の成果を世に問うため、紀要が発行される時期になりました。本学の構成員たちの成果がたくさん投稿されて、充実した紙面で構成される本学の紀要の原稿を拝見するのは、私にとってたいへん楽しみです。みごとな作品集があり、集大成の論文があり、活動状況のわかる研究ノートや調査報告が投稿されます。

紀要は大学の顔であり二つの側面があります。成果を発表する場であると同時に、広報誌の役割も持っています。紀要を発行する組織の個性を、自らの予算を使って表現する場であり、本学の理念がそこに現れます。そのような視点で、この紀要をご覧頂きたいと思います。

今年もいくつかの作品にとくに興味を持ちました。以下に私の感想を述べます。

今村信隆「団十郎くんと団十郎さん」は、大江直吉氏が収集した郷土人形の調査結果をもとにしたものです。京都でつくられ、各地の郷土人形の祖となった伏見人形と、江戸に生まれ、幕末から明治期にかけて活躍した豊原国周の浮世絵をあわせて展示した特別展の記録です。この特別展の間、私もお客さんがある度に案内して何度も見に行きました。伏見区深草鞍ヶ谷町の大阪層群上部の中期更新世の地層からトウヨウゾウの上顎右第二大臼歯が出てきたことがあります。伏見人形は、この稲荷山の粘土で作られ「まんじゅうくい」などが知られています。特別展はさまざまな視点から楽しめる企画となりました。

梅崎由起子「藍洋装展」は、天然灰汁発酵建てによる色出しで作品が得られたものであり、藍のある生活をテーマにした作品が並びました。

城戸崎和佐「原寸模型」と「美術工芸学科研究室改装」は、三次元の空間を改めて意識すると同時に、その変化を見せる、すなわち四次元の世界としてとらえることのできる可視化の試みであったと思います。

野村春花「メンテナンスループ作品～制作者と受容者の持続的な共同制作～」は、学生の視点が最大限に活かされた新しい制作の理念が見せる未来です。これからの発展がとても楽しみである研究ノートとして紀要を飾りました。

その他を含めて、いずれも本学の個性を見せる作品群、研究論文、研究ノートであり、今年も充実した一冊となりました。

紀要の内容は、本学の学術機関リポジトリーにも収められます。その記録をご覧いただき、ご利用の上、ご批判を賜りますよう、あらためてよろしくお願いいたします。

二〇一六年一月一九日

京都造形芸術大学学長　尾池和夫